

安全に関する情報の共有と活用 —「学校安全学シンポジウム2022」の記録—

佐合智弘*, 田中伸治**, 山根孝広***, 庄子元*, 境野直樹*, 仁昌寺真一****, 本山敬祐*****
(令和5年2月1日受理)

要 約

本稿は2022年11月26日(土)に開催した「学校安全学シンポジウム2022—安全に関する情報の共有と活用—」の概要をまとめたものである。本シンポジウムは「第3次学校安全の推進に関する計画」およびGIGAスクール構想を念頭におき、ICTを活用した安全に関する情報の共有と活用に着目した。本シンポジウムを通して、リスクマネジメントや環境改善という観点からヒヤリハット活動の意義を共有した。また、中学校2校による発表ではマッピングによる情報の可視化に加え、教科等横断的な学習や安全な地域づくりへの参画といった学校ならではの安全に関する資質・能力の育成に資する情報活用の実践例が示された。

1. ヒヤリハット活動の基本的な考え方

—研究・製造現場での取り組みを踏まえて—

私が専門にしてきた化学分野を中心に、教育ではない、異業種も含めた一般的なヒヤリハット活動をご紹介します。と思っています。

はじめに、ヒヤリハットとは何かを確認していきます。ヒヤリハットとは重大な災害や事故には至らないのだけでも、作業中にヒヤッしたり、ハットしたような現象のことをいいます。経験則でハインリッヒの法則というものがありまして、重大な事故や災害1件に対して、その裏には多くのヒヤリハットが存在しているというもので、ここをいっぱい挙げておけば、事故を防ぐことができるのではないかというものになります。

実際にどういう活動をしていくかといいますと、まず作業中、学校であれば生徒たちも含めてですけれども、何か活動する人が危険だというふうに感じた事案を報告していきます。ここからヒヤリハットの活動というのは始まるわけです。数多くの報告を集めて、それをグループで情報を共有して、分類、整理していく中で原因を分析した

り、もしくは原因を分析しなくても、次にヒヤッとするようなことがないように何か対策を検討して実施します。最終的にその効果を確認して、実際にヒヤッとした程度が軽減したのかを確認していくのがヒヤリハット活動の流れになります。

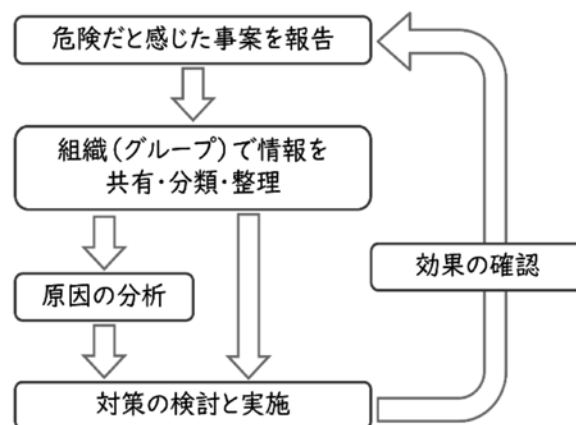


図1 ヒヤリハット活動の流れ

ここに示したような形で、私の発表では少なくとも危機管理というのは自然災害など防ぎようがないものが起きたときに、その影響を最小限にして、その危機的状況から早期復活を図るための管理活動というふうに考えてみたいと思います。学

*岩手大学教育学部、**大阪教育大学附属池田中学校、***矢巾町立矢巾北中学校、
****岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター

校活動でいいますと、いわゆる防災訓練のようなものがこちらに当たるのではないかなと思います。

それに対して、ヒヤリハットはリスク管理に相当するものです。ヒューマンエラーによって起きる、危機に気づいていけば防げるようなものを洗い出して、それらを回避するための管理活動を私の発表内ではリスク管理としていきます。

それでは、実際に研究や製造現場での事故事例から少し考えていきたいと思います。まず、研究現場での事故事例です。低温実験室、いわゆる冷凍庫になっているような部屋に南極から採取した貴重で高価な氷が保管されていたそうです。しかしながら、その保管していた部屋の冷却装置が故障して、室温が上がってしまうというトラブルがありました。これに対してその研究室でどのような対応が取られたかという、機械が壊れているのだから部屋に液体窒素とかドライアイスをいっぱい運び込んで、部屋の温度を下げようという行動がとられました。

さて、ここで何が起きたかという、低温やけなどで済めばよかったですけれども、実際には悲しいことに酸欠で2人が亡くなるという事故につながってしまいました。これは1992年に北海道大学工学部で助手と大学院生が亡くなるという事故でした。理系の先生ではなくても想像できるような話であると思うのですけれども、いわゆる実験のプロのような方もこのような事故に遭ってしまった。酸欠になるということは、彼らは恐らく知識としては持っていたはずですが、ただし、機械トラブルによってすごく焦ってしまい、そういうことがうっかり抜けてしまったことがこの事故の主要因です。このように焦りを主とした意図しないヒューマンエラーというものが存在します。

一方で、こちらは製造現場の事故で、長期間使用されていなかった濃硫酸入りのドラム缶を開ける必要があったそうです。ドラム缶の主成分は鉄なので、鉄と硫酸が反応すると水素が発生してしまうことがあって、実際にそのドラム缶が膨らんでいたそうなのです。そこで、作業を監督してい

る人が天板に小さい穴を開けて、内部のガスを出すようにという指示を出したのです。そのときに、小さいきりのようなもので穴を開けなさいという指示をして、別の作業をしていたそうなのです。実際の作業員は残念ながら監督者の指示の趣旨を理解できずに、きりで穴を開けるというのは大変だということで、溶接に使うようなアセチレンバーナーでドラム缶を加熱して穴を開けてしまおうとしたところ、ドラム缶が爆発したという事故になりました。この事故で亡くなった方が1名、重症者の方が1名という大惨事につながったわけです。こちらは先ほどのうっかりではなく作業員はちゃんと指示を受けていたわけです。指示を受けていたわけですが、作業員が手間がかからないと感じる手順を選んでしまったということが事故の要因のひとつで、これは作業員の安全知識の不足と意図的なヒューマンエラーと言うことができます。

今申し上げた意図する、意図しないというのは、もう少し一般的な言い方をすると過失か故意ということになります。過失というのは、うっかりやほか。故意というのは、危ないかもしれないけれども、手抜きをしていこうというようなことです。過失に対してどうやって減らしていくかということを見ると、いわゆるうっかりをできる限り減らすようなシステムづくりということが大事になります。これに対して、故意によるものというほうを減らしていこうとすると、これは安全意識を徹底していく指導や教育しかありません。それでは不十分な場合には、いわゆる罰則のようなものを規定するのが必要になるかもしれません。

このような取組を踏まえながら安全文化というものの確立を目指す必要があります。実際に製造所や研究所では、こういったことをいろいろなシステムづくり、ルールづくりをして、安全文化の確立をされていてということなのです。

この安全文化の確立をするために、やはり最初に紹介した一連のヒヤリハット活動というのが重要になってきます。ヒヤリハットは報告から始まると言いましたけれども、報告は随時、ヒヤリハッ

トを感じたときに上げられるものです。情報共有としましては、研究や製造現場では月に1回ないしは2回、定期的に、例えばですけれども、第1月曜日に打合せとかという形でスケジューリングされていて、それまでにあったヒヤリハットの例がいろいろ共有されるという状況になります。

ヒヤリハットとして挙げられる内容としては、一般的にニュースになっているのは実験や製造の事故が挙げられるわけですが、実際にはそれだけに限らず、転倒防止措置がされているかといった社内環境や、机の上がきれいにできているかといったヒヤリハットも挙げられるぐらい細かいことまで情報が共有されています。通勤などに関するようなことまで含まれるわけです。このように特定の項目、実験や製造に関する項目だけではなくて、その中で行われる活動の様々なヒヤリハットというものが寄せられています。そして、その都度安全文化を確立するためにシステムの確認であったり、安全意識の向上を見込んでいろいろ情報共有がされているという状況です。

さて、それでは少し話を変えて、ヒヤリハットの報告が多いことが問題なのかということを考えてみたいと思います。当然ながら、ヒヤリハットの報告が多いというのは、リスクが少ないわけではありません。リスクがある程度あるからヒヤリハットの報告が多くなってきます。したがって、あまりに多かったらその現場というのはちょっと危機が多過ぎないかと問題になるわけです。では逆に、ヒヤリハット報告が少ないほうがいいのかというと、実はそうではありません。極端な話、ヒヤリハット報告がゼロだということを考えてみると、人が働いたり、生活している上で、ミスや事故が発生しないということは非現実的です。したがって、ヒヤリハット報告が少ないというのはよくないわけです。絶対に何かしらヒヤリハットの報告は上がってこなければいけないということが根底にあります。

しかしながら、民間企業や研究所でも、ヒヤリハット報告が少ないという状況が生まれています。なぜヒヤリハット報告が少ない状況になって

しまうのかというと、幾つか要因が考えられます。

まずは報告者にとって何がヒヤリハットかが分からないということが考えられます。危ないと思ったけれども、これは報告していいのか、しなくてもいいのかというような状態です。そういった状態についてはやはりヒヤリハットの内容を根気よく周知したり、実際に報告するときにはこういう事例として報告したらいいというのを示し続けていく必要があるわけです。

また、実際に報告するとなると、やはり手間がかかります。こういったところは、メールや入力フォーム等を活用していくことが大事になります。

特に企業で一番多く挙げられる状況として、ヒヤリハットの報告が悪い評価や査定に影響すると危惧されることです。ヒヤリハット、つまり自分はちょっと危ないことをしてしまいましたという、いわゆる反省文のような意識を持ってしまうと、なかなかヒヤリハット報告というのは上げることができません。これについてはヒヤリハット報告が少ないという状況はよくないわけですから、なるべく多くの報告を上げてもらう必要があります。したがって、匿名の報告であったり、評価に影響しないということをルール化して周知するというようなことを徹底する必要があります。

一番下はさらに問題で、ヒヤリやハットとしない状態です。そういう方には安全への感性を高める教育というのを徹底して行う必要があります。

このように、職場や生活の環境改善のための報告というようなポジティブな意識を持って、このヒヤリハット活動ということを行うのが大事です。また、対策の検討と実施というのは報告に対する成果になりますので、報告したことに対して答えを出すこと、フィードバックをすることでこの一連の流れを継続して行っていくことが可能になると言えます。そして、組織、グループで情報を共有、分類、整理していく中で、潜在的にある危険を未然に発見し、対策を取るべき危険の絞り込み、上げられてきたヒヤリハットを全て対応していくというのはなかなか難しいと思うので、順

序をつけるというか、リスクの評価をしていくということも大事な要素になっています。

最後に学校現場で考えてみたいと思います。学校での事故事例としては、様々ありますけれども、中学校理科の実験で行われる硫化水素の実験というのは比較的毎年のように事故事例として上がってきているものです。今年も偶然6月9日という同じ日に横浜市と広島県のほうで事故がありました。この記事を見てみると、横浜市のほうでは実験中理科室は換気していて、消防による現場検証では原因は特定できなかったという記述がありますし、広島県のほうでも同様に換気扇を回して換気を十分にしていたというような記述があります。さらに、教育委員会のほうで万全の安全対策を取るように全学校に指導するというふうにしているわけですが、具体的にどういう指導をしているのかというのは分からないです。いずれも恐らく理科の先生、授業をやっていた先生はその危険性というのは認識して換気していたということで、もしこの2つのおり授業内容に問題がなかったならどうすればいいのかという話です。

改めてヒヤリハットの話に戻ると、事故の裏側には多くのヒヤリハットがあるはずですが、ヒヤリハットの報告があるにもかかわらず事故になっている場合というような状況であれば、原因の分析が間違っていて、対策が不十分であると言えます。正しく分析して活用する。ただ報告を集めて終わりにならないようにする必要があります。

さらに、ヒヤリハットの報告がない場合ということ、システムのあるなしというものが出てきます。システムがない場合は、報告するシステムをつくる必要がありますし、報告するシステムはあるのだけれども、ヒヤリハットの報告そのものがないという場合には、積極的に報告する習慣をつけていくということが重要です。

学校の中でこのヒヤリハットというのは、生徒たちの活動もそうですし、学校の先生の活動というものもあるはずですが、特に生徒たちの活動というのは、生徒たちの数だけヒヤリハットが上がってくるわけですが、今ご紹介したような理

科の授業を考えると、年間通して数回、中学校の例えば理科の授業、今の硫化水素を発生させるという授業であれば、3クラスしかない中学校であれば、年間その学校では3件しか実践例が出てこないわけです。そのため、1つの学校でのヒヤリハット報告から改善活動するには限界がある場合があります。したがって、単独校ではなくて複数校、自治体レベル、ないしは場合によっては国レベルのようなものでヒヤリハットというものを共有していくことが重要になる場合もあると私は考えています。これは必ずしも実験とかに限った話ではなく、転倒事故というような一般的な学校生活の中で出てくるヒヤリハット報告とも全て同じように考えることができます。

最後になりますけれども、ヒヤリハット報告というのはリスク管理の基礎になります。報告を上げる人も報告を受ける人も、ポジティブな活動として取り組むことが大事です。正しいリスク評価をしていただいて、それに適切な対応をすることで、組織、学校をより安全な環境へしていくことができるのではないかなと期待されます。

(佐合 智弘)

2. 校内ヒヤリハット登録システムについて

はじめに、本校の紹介をさせていただきます。本校は各学年4クラスで、全校生徒は433名です。職員構成は、校長以下教員17名、常勤の先生2人、非常勤の先生7名でやっております。大阪教育大学附属の小学校、中学校、高校が大阪教育大学の池田キャンパスの中に隣接しています。

大阪教育大学の附属校というずっと専任でおられる先生がたくさんいて特別な学校のように思われるかも知れませんが、現在本校で6年以上継続して勤務している者は3名で、ほとんどの先生が公立学校から人事交流で来ていただいています。ですので、いろんな学校安全の取組をしていますが、附属校だから特別というより一般の先生が継続してつくり上げてきたものだという形で聞いていただけると良いのかなと思っております。

学校目標は、自主・自律の精神の育成を掲げて

います。自分自身で考えて判断して、責任ある行動が取れる人の育成というのを目標に教育方針も立てています。この教育目標、教育方針の下、学校安全と国際教育に力を入れて取り組んでいる学校です。この教育目標、それから教育方針は、学校安全の取組の基礎となっています。

学校安全の取組に至った経緯なのですが、1つ目は時代の要請です。学校におけるけがや学校への不審者、登下校における交通災害、最近言われますけれども地震とか大雨、自然災害、学校安全は喫緊の課題ということが学校安全に取り組む1つ目の経緯になります。

2つ目は生徒たちの実態です。中学生時代というのは、自発性が培われて、自分で考えて、自分で行動する力が一番成長する時期ではないかということで、安全の意識とか行動を身につけるのには一番適した年齢ではないかと考えております。

3つ目は、先ほど小中高が隣接していましたが、附属池田小学校が隣にありまして、2001年に起きた附属池田小学校の事件を踏まえて、キャンパス全体で安全に取り組んでいます。

学校安全に取り組むために様々な組織として、校内校務分掌のなかに安全委員会を設けています。また、本校では安全主任も設置しております。例えば学校内で何かこの辺が危ないとか、こういうことがあったよという情報は、多くの学校では管理職に話が届いてというのが多いかと思えます。ただし、安全を専門に扱う人や専門に扱う組織があるというのは大きなことだと考えております。

安全に関して取り組む仕組みなのですが、学校安全マニュアルを毎年少しずつ更新しています。マニュアルが整備されているということと、安全マニュアルは4月に必ず職員で読み合わせをして新しく来られた先生にも知っていただきます。

それから、4月に管理職から提示される学校経営計画にも目標と方針書かれています。そして、重点事項に安全が明記されています。したがって、学校安全が学校経営の中に位置づけられている形で本校は動いています。

安全に関する計画ですが、学校安全計画と学校保健計画の一部になりますが、教科で取り組むこと、特活、部活動で取り組むこと、安全管理の部分という形で計画がされています。このような学校の組織体制、仕組み、計画の中で学校安全の実践として様々な実践を行っております。少し特徴的な取組を紹介させてください。本校では生徒会事故対応訓練というのがあります。もしも部活動中に誰かが倒れたときに、顧問の先生が周りにいなかったらどういう行動するのかという訓練を毎年部活動の生徒を集めてやっています。参加した生徒たちは自分たちの判断や行動はどうだったのかという振り返りを行っております。

安全に関する実践の中でヒヤリハット登録システムを昨年度から試行期間的に使い始めて、今年度から本格実施しています。現在も実施しているので、まとめきれていない部分もありますが、現在の取組の様子を見ていただけたらと思います。

本校では2年生と3年生は1人1台iPadを持っています。今年の1年生はChromebookを持っています。それぞれの端末からヒヤリハット登録システムにアクセスして校内の情報を登録するように操作すると、校内地図が出てきます。

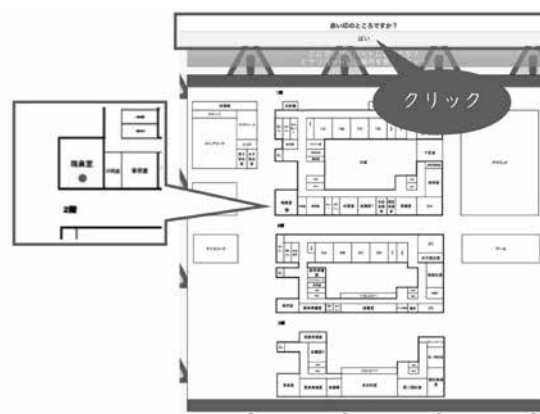


図2 校内ヒヤリハットシステム

校舎の地図をもとに、自分がヒヤリハット、危険だと感じたのかをクリックすると、赤い印を打つこととなります。この赤い印をクリックして、間違いがなければ情報を登録していきます。

まず、登録者として生徒なら学年、職員なら職

員を選びます。次はクラスを選んで、番号、男女を選ぶということになります。その次は、ヒヤリハットを感じたのがいつだったのかというふうなことで、日時、時間については1時間目だったのか、1、2時間目の休み時間だったのか、2時間目だったのか等が選べるようになっています。

次に、その時間が何の授業だったのか、特別活動だったのかということを選びます。休み時間であれば、「なし」になります。こういうことを入力することによって、教科の時間のときに何が起きたのかということもデータとして回収しています。

次に、どういうことが起こったのかという内容について、転んだのか、落ちたのか、ぶつかったのか、物が倒れてきたのかということ、その他ということも書いてあります。その次なのですけれども、ここまで入力すると、次は改善、なぜそういうことが起こったのか、どういうふうに改善すべきなのかということが入力できます。今後自分ができることとしてはどういうことができますか、どういうことを気をつけたいですかというふうな、ヒヤリハット、危険を感じたことの振り返りも入力できます。ここまで入力すると、入力内容が間違いないか確認して、最後に登録します。ここまでが生徒もしくは職員が入力する画面です。

入力した画面をどのようにシステムとして集計したのが見えるのかという話をしていきます。先ほどいろいろ分類して入力した項目ごとに数字が出ております。例えば学年とか性別、時間帯、理由とかでソートをかけたりすることもできます。学年ごとに分けると、1年生、2年生、3年生、教職員という種別でデータの表示の仕方が変わっております。また、レイアウトということで、例えば1年生が入力した総数のところをクリックすると、校舎の地図の中で1年生がクリックしたところが見えてきます。こういうところでヒヤリハットを感じた子がいるのだなということが視覚的にも分かる形になっています。

入力されたデータの日付の期間を変えることができます。今は11月の設定になっているので少な

かったですけれども、この設定を変えて4月からにすると大分数字が増えたかと思います。大体どこの辺が危険だというふうな形で生徒たちが入力しているのかが分かるかと思います。

このデータはエクセルで処理できる形でダウンロードすることができます。これが集計のデータでした。本校でこれをどのように活用しているのかということ、保健の授業の傷害防止という分野で使っています。データの分析として、先ほどのデータを生徒たちが分かるような形で少しだけ加工して、生徒たちにデータとして配り、図についても教員が考えるテーマで配付しております。

保健の時間ではこれを2時間分の時間を使って利用していますが、1時間目は先ほどのデータを見てどういうところが危ないのだろうかということ、エクセルであれば生徒も自分たちでソートをかけたりすることができますので、1時間使って分析しています。2時間目は、いろんなヒヤリハットした部分の中で、あなたはどのような対策ができるのかということで、本校では最終的にピクトグラム制作につなげています。

ヒヤリハットシステムの活用なのですけれども、データの活用になりますが、まず美術の授業でピクトグラムとは何なのかという話をし、それであるとは考えの統合という時間を設けているそうです。いろんな子の意見を、自分はここの部分が危ないと思っているとか、他の人との交流の時間というふうに考えていただけたらと思います。

美術の時間のピクトグラムは、安全の授業をヒヤリハット登録システムの保健と、あと理科の授業での危険を考える授業、それから技術の中での安全について考える授業も全部含めて美術で最終的にピクトグラムをつくるということになっています。ですので、美術の授業ではヒヤリハットだけを扱っているわけではないのですけれども、最終的に危険を防止するためのピクトグラムにしていくという流れになっています。本校ではこれをいろんな教科をまたいで学習しますので、学際的な単元という形で取り組んでいます。

最後にまとめになっていくのですけれども、ヒ

ヤリハット登録システムということで、利点はデジタルデータが手に入ること、あと生徒が入力できるので、生徒目線のデータが入ること、それからさきほどの図面で見えていただいたように、視覚的に分かること。あとはハインリッヒの法則の話がありましたけれども、1とか29とか、けがが起こってしまったというのではなくて、危険に感じたというふうなことで300のデータが入ることが利点と考えています。それから、1人1台のICT機器を持っていますので、いつでも入力できるというのがポイントだと思っています。

ヒヤリハット登録システムを運用するポイントにつきましては、やはり定期的に入力の機会を設けることが必要だと思っています。いつでも入力是可以するのですが、本校では2週間に1回、生徒会の安全委員会の子を中心に終礼の時間にパソコンを開いて入力する時間を設けています。それと、ただ単に危険だっただけではなくて、入力するときも含めて、改善と防止について考えさせる機会が必要だと感じています。

ヒヤリハット登録システムの効果ですけれども、入力するということが、入力の機会があるというのは生徒たちの意識の中にありますので、どこが危ないのかなという形で周りを見る目を少し持っているということから、安全の意識が高まるのではないかと考えています。それから、やはりデータを分析することによって、危険箇所を減らそうとか、安全行動を取ろうとするのではないかと期待しております。まだ途中の取組ですので結論づけるところまではいかないですけども、このような形で取り組んでいます。

(田中 伸治)

3. デジタル安全マップづくり

—ICTの活用による地域との協働と社会参画—

最初に本校の紹介から始めます。本校があるのは音楽とスポーツのまち矢巾町です。小学校4校、中学校2校から成る小さな町です。矢巾北中学校の生徒数は385名、学級数は通常学級各学年4クラス、特別支援2クラスです。生徒の主な活

躍ですが、特設合唱部、昨年度は全国金賞、今年度は全国銀賞と、女子ハンドボール部、全国大会出場と、音楽とスポーツのまちを地でいっている学校です。

本校における喫緊の課題として、1つ目が本校学区の大きな変化による課題、2つ目が今日の学校課題で、この順番で説明します。

まず、本校学区の大きな変化による課題です。岩手医科大学が2020年度に本校の学区に全面移転しました。それに前後して、矢巾スマートインターチェンジが開通しました。本校と学区の煙山小・矢巾東小学校は、岩手医大と矢巾スマートインターチェンジに挟まれる形で位置しています。学校運営協議会におきましても本校の喫緊の課題として第1に交通安全、第2にネット・スマホ依存という形で、交通安全が喫緊の課題となりました。

続きまして、今日の学校課題です。令和の日本型教育として、ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びが求められています。1人1台配付された端末に慣れて、道具として活用することも求められています。それに伴う教員のICTスキルアップ、これも同様に求められています。学区の大きな変化による課題と今日的な学校課題への対応がデジタル安全マップにつながりました。

本校のデジタル安全マップについて、まずは紙媒体のマップを御覧ください。



図3 矢巾北中学校区デジタル安全マップ

17の危険箇所について、写真、場所の名前、一言コメントが添えられています。左下には、製作者として本校生徒会、学区の2つの小学校5、6

年生、本校PTA、そして右上のほうにはQRコードがあって、ここから17か所以外の危険箇所を見ることができます。

デジタル安全マップの仕組みを説明していきます。今回はGoogleマップのレイヤーという仕組みを活用しています。層と訳されるかと思いますが、一番下にGoogleマップがあって、その上に本校矢巾北中学校の作成するレイヤー、矢巾東小学校が作成するレイヤー、煙山小学校が作成するレイヤー、そしてPTAが作成するレイヤーの4層が重なる構造になっています。透明な層が4枚重なっていると考えてもらうと良いと思います。一例として、矢巾北中学校のレイヤーだけを選択すると、本校生徒が危険箇所として選んだ赤いマーカーだけが表れます。矢巾東小学校のレイヤーだけを選択すると、青いマーカーだけが表れます。

マーカーをタップしてみると、紙媒体の安全マップにあったような写真、タイトル、コメントが出てきます。幾つか見ていきたいと思います。これは、赤林地区の細道です。コメントには「道が細くなるが、車がスピードを落とさない」と書かれています。ここは怖い場所で、私も毎日通勤しています。本校の北側のアンダーパスについては、「下りはスピードが出る、上りはふらつく、一方通行逆走あり」と書かれています。これは怖いですね。このほか、小学生がつくったものの中には「僕んちの前の十字路」とか「〇〇君の家の前の道路」等、ほほ笑ましいネーミングもありました。当然個人情報絡むものについては、修正した上で登録しています。

小中学校、PTAで選んだ危険箇所の中から重なるの多い17か所を代表的な危険箇所として紙媒体を作成しました。これを生徒会の生活委員が地域の店舗に掲示依頼しています。

安全マップのコンセプトとして、学区の危険箇所について生徒一人一人が考え、確認し、意識づけることを最も大切に指導してきました。安全マップは結果としてできるものと位置づけました。ICTを活用した同時編集を教師、生徒全員が

体験することも狙っています。

続きまして、生徒の取組です。地区集会を開きました。毎月1日を安全の日としているので、それに重ねています。進行は地区生徒会長です。どういった集会をしたかといいますと、以下の視点を参考に各地区の危険箇所について話し合いを行いました。視点というのは、(ア)交通量が多い、道路が狭い、横断歩道がない等の交通安全の視点での危険箇所、(イ)川や用水路、崖などの危険箇所、(ウ)街灯がなく暗い等、不審者対策の視点での危険箇所。こうした視点のもと、地区の危険箇所を一、二か所に決定します。最終的には交通安全の視点の危険箇所がどこの地区も選ばれています。

安全マップへのデータ入力です。地図を4枚準備しました。地区の危険箇所が決まりましたが、この入力者、代表者は安全マップQRコードから入って、本物の安全マップをつくります。そのほかの全員は、練習用QRコードから入って、自分の学級のレイヤーに入力します。入力の体験をするという形になります。マップに登録する写真は、Googleマップのストリートビューからトリミングで添付します。

練習用マップを用意した経緯ですけれども、全員にICTを使った活動をさせたいという思いと、385人の全校生徒が同じ地図上で同時編集機能を使うのは非常に難しいということで、地図は学年ごと、レイヤーは学級ごととしています。このような形で生徒が活動しています。

小学校とPTAの取組について、小学校の取組からお話します。本校からデジタル安全マップの共同作成の呼びかけを2つの小学校にしました。両校から賛同いただきまして、各校の安全担当者で作成方法、見通しを共有しました。次に、PTAの取組です。これは、本校のPTAにお願いしておりますが、本校では通年PTAによる街頭指導をしています。自転車の乗り方等、気づいたことを学校に報告していただいています。4月には、保護者地区会長が各地区の危険箇所を学校に報告します。そして、生徒への注意喚起をしています。

今回は授業参観等で保護者が来校した際に、拡大地図に危険箇所を記入していただきました。保護者の皆さんには地図に番号を打ってその中身を用紙に記入していただきました。保護者に記入していただいた用紙は、生徒会の生活委員会がデータ化して緑マークで登録しました。

デジタル安全マップづくりを指導するための教員研修は、生徒の地区集会前に実施しました。ICT研修の一環としての実施です。生徒からの質問に答えられるよう、みんなで事前学習をしました。

デジタル安全マップづくりを通じた生徒の社会参画の経緯についてですが、生徒会の生活委員会で紙の安全マップにある17か所のうち特に危険な場所はどこか、どうすれば事故を防止できるかを協議しました。結果として、矢巾スマートインター付近交差点とアルコ裏の十字路の2か所が特に危ないと判断して、生徒会としてこの2か所への信号機または横断歩道設置の要望書を町役場に提出することとしました。

要望書の申請者は、生徒会長と生活委員長の連名です。要望書の理由欄には「岩手医大の移転、また矢巾スマートインターチェンジができたことにより、矢巾町内、特に矢巾北中学校区の交通量が急激に増加し、危険箇所も増加している。上記の2か所は、特に危険な場所である」と記載しています。要望書にはデジタル安全マップを添付資料としました。備考欄には、「矢巾北中学校生徒会では、小中学校の安全への意識を高めるため、煙山小学校、矢巾東小学校、本校PTA、本校学校連絡協議会と協力して、デジタル安全マップを作成しました。その中で特に危険な場所について今回要望します」と記載しています。

生徒の安全意識の向上について。生徒の安全意識を一朝一夕で高めるのは非常に難しいということで、本校では多面的、総合的に安全意識を高めることを大切にしています。幾つか紹介します。

まずは避難訓練です。防火扉を閉じて小さな扉を通る体験をさせています。これは、火災で避難する際に防火扉が閉じるわけですけれども、煙の

ために小さな扉を見つけられないのか、あるいはこの扉の存在を知らずに行き止まりと思ったのか、扉の前で数人が亡くなる事故が全国的に時々発生しています。今年も起こっているようです。本校ではこれらの事例を生徒に紹介した上で、全員にこの小さな扉をくぐらせる体験をさせ、生徒の記憶の奥底にしっかり残そうと考えています。

全員に防火扉を通る体験をさせるために工夫もしました。本校では1階教室からの避難ルートには防火扉がありません。しかしながら、何とか全員に防火扉をくぐらせたいということで、避難訓練時の授業は全クラス2階以上で行っています。特別教室を活用しました。また、通常の避難ルートである外階段、これはコンクリートでできた外階段ですけれども、これにも防火扉がありません。これについては、外階段は火事の前地震で崩れて通れなくなるという設定にしました。このような形で、必然性があり、なおかつ全員が防火扉の小さな扉を通る練習をしています。

次に、日時予告なしの避難訓練も行いました。これは先月行ったところですが、月曜日に事前指導をして、その週の中のいつか実施しますよというものです。放送の中で、火災発生場所と通れない場所を指定します。生徒は自分の判断で安全かつ最短距離で校庭に避難するというような活動もしました。

AEDについて、教職員もAED研修会を行っているのですが、生徒会の保健委員会でも体験的な学習を実施しています。実際にAEDを使う場面ではその場にいる人がやらなければならないので、生徒にも使用法を覚えてほしいと思っています。

次に、ネット・スマホ依存の未然防止についてです。現在、全国的にネット・スマホ依存が増えてきていると思われます。また、保護者啓発のために本校でも講演会等を企画するのですが、なかなか保護者が集まってくれないと、多くの学校で同様の悩みを抱えていると思います。

本校で行った取組の1つ目として、全校生徒にスクリーニングテストを実施しました。これは10

問程度のテストでネット・スマホへの依存度をはかるものです。三者面談でこの結果を知らせた後、親子で啓発動画を視聴してもらいました。我が子が依存の可能性があるというのを分かった上で、啓発動画を見るという流れになっています。これにより、全ての保護者の啓発をすることができました。ちなみに、この動画は本校の実態を踏まえて、専門家に作成していただきました。

取組の2つ目として、新入生体験入学や新入生保護者説明会で情報モラル教育として動画視聴をしていただく予定です。このように、いろいろな場面で安全への意識を高めています。

話を安全マップに戻したいと思います。我々の取組に賛同いただきました町内のもう一つの中学校区が、同じ方法でデジタル安全マップを現在作成中です。矢巾町自体が2つの中学校区でなっているものですから、全町の取組になることとなります。これからも様々な刺激を生徒に与えながら、安全、安心な中学校生活を送らせたいと思います。

(山根 孝広)

4. 討論 (抄)

○安全教育で想定しているリスクの範囲と程度

佐合：安全教育において、どのようなリスクをどの程度想定されているのかを教えてください。

田中：学校安全を安全管理と安全教育と分けたときに、生徒たちに対しての安全教育としての目標は、資質・能力をどのようにつけていくかが一番大事かと考えています。昨今安全といいますが、例えば登下校は大丈夫なのか、地震対策は大丈夫なのか、日頃の生活面での安全は大丈夫なのかと、いろんな場面での安全はあるのですけれども、全てを中学校のカリキュラムで取り扱うのはもはや難しいと考えております。ですので、危険を未然に回避するためにはどうしたらいいのか、もしも何かが起こってしまった場合にはどう判断して行動するのかを一番重視して取り組むようにしています。もちろん、そのためには根底となる知識も必要だとは思いますが、そういうものを踏まえながら資質・能力を高めることを一番の目的

として、避難訓練ひとつにしても、避難訓練を通してという形で考えさせることを大切にしたいと考えています。

○教員の安全に関する意識を高める手立て

佐合：生徒だけでなく教員の意識も高めていく必要があると思いますが、具体的に工夫されていることがありましたら教えてください。

田中：もちろん先生たち自身にも意識を持ってやってもらうということがすごく大事だと考えています。そのためにも、安全主任1人だけが何か安全について動くのではなくて、校内の中に安全委員を設けています。約3分の1の教員がそこに入っていて、安全委員の教員を中心に安全主任だけが訓練を計画して進めるのではなくて、いろんな教員が進めるという体制を取っているのと、防犯訓練やプール事故対応訓練といった訓練があるのですけれども、そのたびに振り返りで研究討議みたいな形で話し合う場面が一番大事なのかなと考えています。そこで先生方も意識が深まる。

やはり自分の頭で考えることが、生徒たちも教員も同じく重要なのかなと思います。年間で何回も時間が取れないのですけれども、取っている時間については話し合って何がベストなのかを考えることが先生方の意識を高めて、考える力もつくのかなというふうに私は考えております。

○生徒と大人のリスク認知に関する相違点

佐合：デジタル安全マップを作成するに当たって、生徒たちの目線とPTAの方や教職員も含めて大人目線で見たときと違いがありましたか。また、生徒から出てきたリスクに対して、先生方が見てそんなところにリスク感じているのかというエピソードがあれば教えてください。

山根：大人目線と生徒目線というところについて、交通安全に関しては結構似通っていたかなと思います。ただ、生徒目線だとこの場所は下校時に暗くなるので危ないとか、あとは徒歩で登下校している生徒はこの出っ張りが危ないとか、道路

のちょっとした出っ張りなんかも本当に大人の目では分からないような指摘があって、道路の写真が安全マップに載っていたりもします。そういうのはそのまま生かしております。

○ヒヤリハット活動を継続する際の留意点

田中：ヒヤリハットをやっていく上でやりっ放しでは駄目だと考えています。継続する際の視点や指標等、振り返る材料として何かあれば。

佐合：ヒヤリハットの活動をしていく中で、生徒たち自身の安全への意識の高まりとか、減らそうと考える自主的な行動につながるというのが一番のところで、その辺りは先生方の目で見えていくしかならないのではないかと思います。

ヒヤリハットの活動全体を通したときに、報告から始まって対策とかを検討して実施する、その効果を確認するというところまでが一連の流れになるわけですが、これに関しては週、月、年という短期スパンではなく、少し時間を置いて同じ対策を取った場所に対してヒヤリハットが本当に件数として減っているのか、効果が現れているのかというのを経時変化で追うしかないのではないかなと思います。

田中：効果の確認というところが一番難しいところだというふうに思います。本校であれば、美術の授業を使ってピクトグラムを貼っていなかったときに比べてどうかというところを見ていかなければならないと改めて強く感じました。

○学校において繰り返される事故の原因究明

山根：佐合先生に質問です。私も理科教師なものですから関心を持って聞いたのですが、授業内容に問題がなかったと収めてしまって良いのかと思ったのです。理科室の換気効率といいますか、ドアの位置とか、窓の位置とか、風が吹いているかどうかとか、そういった換気の効率とか、使う塩酸の濃度、それから実験に使う鉄のメッシュの細かさですね。あとは混ぜるときの混ぜ具合とかによって化合する割合、硫化鉄になる割合が変わってくるわけです。硫化鉄が多くでき

ていればそれだけ硫化水素が多く出てくると思うので、そういったところについて予備実験をしながら必要最小限の濃度や量でやっていく。教科書どおりの濃度ではなくて、窓の位置とか風向きによって実験が成立する程度に濃度を落とす。この新聞記事だと授業内容に問題なかったと、そう言うてしまうと繰り返されるのかなということ、先生のお考えを伺いたいと思います。

佐合：新聞記事からは本当に授業内容に問題がなかったのかどうかというのは、正直なところ判断がつかないです。先生がおっしゃるように、薬品の濃度であるとか、メッシュの細かさみたいところはすごく重要な要素になってくるので、そういったところを1個1個検証していかなければいけないのではないかなというふうには思います。

ただ一方で、一応消防署の確認で特に問題がなかった、事故原因が特定できなかったということであれば、対応としてはその後どうしようもないのではないかなということになります。

多くの方がご存じの通りなのですが、硫化水素のこの事故というのは毎年発生しているわけです。恐らく中学校理科の先生方は、これは危険な実験だと認識されている方がほとんどではないかなというふうに思います。そういう意識を持たれた上で、それでも毎年報道になってしまう、救急搬送されてしまうというのは、やはりもう少し根本的に原因を突き止めて、ヒヤリハットという形でみんなで共有していかなければいけないのではないかと考えているところです。

○ヒヤリハット登録システムの効用

山根：田中先生に2つ質問したいと思います。1つ目は、1回の入力チャンスで大体何%ぐらいの生徒がヒヤリハット登録システムに入力しているものなのかをお知らせ願いたいと思います。

田中：いつでも入力できるというのがこのシステムの特徴ではありますが、例えば、日頃生活をしていて何かちょっと危ないなと気づいたからといってわざわざiPadを出して入力する生徒はほとんどいないと思います。システムを導入し始め

た頃はやはりデジタル機器は生徒たちも面白みを感じて、結構興味を持って幾つかデータが入力されているというのは聞きましたけれども、今では安全委員の生徒が終礼のときに言わないと、なかなか入力されないというのが現状かと思っています。

その中で、1回の入力機会にどのぐらいの生徒が入力しているのかということですが、データを見る限りは、概ねクラスの半分以上の生徒は入力しているかと思っています。現状を見て限りは、何かなかったかなと思い出したり、日頃から意識させる一つにもなるのかと考えます。ただ、今のところそれが良い状態なのか悪い状態なのかというふうなのは様子を見てみないとわかりません。入力の機会があれば多くの生徒は入力するのですが、7割、8割ぐらいまで、特に下級生の子ほど結構入力しているというのが現状かと思っています。

山根：ありがとうございます。もう一つお願いしたいと思います。先生の実践を聞いていて、改善策や対策を考えたり、振り返りや授業への連動が非常に素晴らしいなと思って聞いておりました。すごく難しいところだと思うのですが、ヒヤリハット登録システムの導入によって、例えばけがをして保健室に行く生徒が減ったとか、防げた事故があったとか、成果が何かあれば教えていただければと思います。

田中：今年から本格実施していますので、前年と比べて前年比で考えたらすごく減っているとかというデータがお渡しできればとは思いますが、今のところ保健室でけがが減ったとかいうことまで正確には確認できていない状況です。ですので、実際にけがをしているというのと、それがヒヤリハットで防げるものだったのか等を学校として分析して、ブラッシュアップしながら継続していかなければならないと認識しています。

○安全への感性

庄子：佐合先生へのご質問として、先生のご報告の中で安全への感性という表現があったかと思う

のですが、安全への感性として具体的にはどのようなものが想定されるのかということをお教えいただければと思います。

佐合：様々な形態のリスクというものが存在するので一概には言えないのですが、やはり共通して言えることとしては、その行動を取ったときに、どういうリスクがあるか、いわゆる危険予知に相当するものですが、危険予知のトレーニングを積んでリスクに対して感性を高めていくということが非常に重要ではないかと思っています。

庄子：この安全への感性という点に関しましては、実際の現場で生徒さんの様子を見られている先生方にも少しお聞きしたいと思っています。田中先生は生徒さんに求めている安全への感性としてどのようなものを想定されていますでしょうか。

田中：危険だなということはどう察知することかと思っています。本校は教育目標をはじめ学校の重点として安全には力を入れていることは生徒たちも分かっていることなので、うちは安全には力を入れている学校だからというのが生徒たちの意識の中で根づいている部分が少なからずあるのかなと思っています。例えば、ちょっとしんどそうな子がいるときでも生徒たちが自主的にいろいろ動いて周りの大人に知らせたりできているようなときに、安全の感性というのが働いているのかなとは思います。もちろん、ヒヤリハットだけが安全の取組ではないので、学校全体の教育活動のいろんなところでちりばめることで、生徒たちの安全に対する感性につながってほしいと思っています。

庄子：私から追加でお聞きしたいのですが、田中先生の実践で生徒さんの危険認知、ここが危ないという登録の件数が私は1年生が少なく3年生のほうが多くなるのかなと思っていたのですが、決してそんなことはなくて、1年生の段階からかなりのポイントが打たれていたと思うのですが、この点に関して、入学したての1年生が安全に関する興味関心ではないですが、ある種の感性を高めるような秘訣とございますか、取り組

まれていることがありましたら教えてください。

田中：一番大きいと思っるところなのですが、入学してすぐに、本校で勉強や活動をしていく上で必要なことを教科の枠を超えて生徒たちに教えるという時間があります。本校では基礎技能講座という言い方をしています。例えば、プレゼンテーションもたくさん課しますので、ICT機器の使い方やスライドの作り方や発表のときに大事なポイント等は教科の枠を超えて共通で必要なことですので、それらをまとめて最初に全部説明したり、実践させたりする時間があります。

その中に学校安全の時間を1時間設けてあります。その中で、本校の安全の仕組み、例えば学校内の敷地にいる大人の人はみんな名札をしているとか、それによって教員なのか、保護者なのかを見分けたりするようなこともやっています。そういう基本的なことをはじめ、もしも非常ベルが鳴ったらどうするのか、またそれぞれ学校の施設によっていろんな事情がありますので、そういうことを説明する時間があります。

その中で、安全についてどういう意識を持ってほしいのかということと、生徒はいろんな小学校から集まって安全に関して受けてきた教育も違うと思いますので、そういうのも照らし合わせながら、最初に意識を高める上でも安全に関する話を1時間取っています。これは安全主任が各クラスを回ってやるのですけれども、生徒たちにとっても印象強く、具体的なことが分かって良いのかなと。こういう仕組みが効果的だと感じています。

庄子：非常によく分かりました。山根先生に同様の質問をお願いします。

山根：危険を危険として感じるという力だと思います。本校の場合、交通安全については医大が移転してスマートインターができて誰の目にも明らかかなものですから、これに関しては自然と危険だと感じる心はみんな持っていたと思います。ただ、ネット・スマホ依存についてはそれが持っていなかった。その感性を持たせるためにスクリーニングテストをして、自分は依存傾向があるというのを感じた上で、親子で学習していくという形で危

険性を感じさせるための手だてを打ちました。

○汎用性のあるシステムの構築

庄子：ICTの活用の部分に関して、ヒヤリハットを収集するシステムの中で、汎用性があるのかという質問なのですけれども、もし田中先生のところでヒヤリハット登録システムがなかったとして、同様のものを収集するとしたら、どのような方法が考えられるのかという点についてお考えがあればお教えいただきたいです。

田中：もしもあのシステムがなくて同じようなことができますかということなのですが、ヒヤリハット登録システムは地図が出て視覚的に分かるというのはすごく効果的なのですけれども、そこを除けば本当にGoogleフォームのようなもので、あとは選択式にしてしまえば、どこの場所のデータが多いかということは把握できます。地域によって違いますけれども、全国的にGIGAスクール構想で皆さんデバイスをお持ちかと思うので、アンケートシステムを使えば手軽にできるのではないかなとは感じております。

庄子：ありがとうございます。山根先生には、どういう手順で先生方が何に気をつければ各学校で導入できるのかという点についてお教えいただければと思います。

山根：一番時間がかかったのは、レイヤーの仕組みを活用して385人が同時編集できる形にしたところでした。その仕組みが確定してからはスムーズでした。あとは、教職員が学校の実態を理解して、ちょっと新しいことだけれども、みんなで生徒の安全を守るためにやってみようという気持ちを醸成するのが一番大事かなと思います。

庄子：マッピングの効果といいますか可視化ということに対する効果という点になるかと思うのですが、その大前提として危険箇所を登録しているということは、検証した場合にはそれが危険ではなくて、実際には安全であるというふうな判断も行われる事例もあるかと思います。安全であると実際に判断する際の基準であったり検証方法がありましたら教えていただきたいというご質問が田

中先生に来ています。

田中：まず、生徒たちがいろいろ記入したのものに関して、全て必ず何か対策までいくのか、個人でちょっと気をつけてもらうのかというのに分かれていくところもあるかなと思います。ただ、1個1個について検証は必要かなと思っています。例えば、今回のヒヤリハット登録システムのアンケートではないのですが、体育館の2階のフロアにある細い観客席みたいところの板がぐらぐらで落ちそうで怖いですという書き込みがありました。板がぐらぐらしていることは確かなのですが、それは表面の板がぐらぐらしているだけであって、そこが崩れることはないのです。ただ、その生徒が言いたかったのはそこが崩れ落ちるんじゃないですか、危険じゃないですかということ。そういう事例については、生徒たちに返さなければならぬかなと思います。やはりそこで不安を感じるということについてどう対応していくのかという、板がちょっと浮いているようなところについては修繕していくのかというように、1個1個、必ず生徒たちが思っているものがそのまま直接生徒たちが感じている危険に直結するものとしなものもあるかなと思いますので、それによって生徒への返し方や改善の方法というのが変わってくるのかなというふうに感じております。

○教科等横断的な安全教育

庄子：田中先生に対して、安全教育について、ご発表いただいた以外に具体的にどのような授業実践をされているか教えていただきたいのですが。

田中：まず教科でやっていることと教科外でやっていることの2つに大きく分かれるのかなと思っております。本校でも時間の確保が難しいところだと感じていまして、教科等にある程度担っていただく、例えば社会においても公民分野で自助、公助、共助ということを勉強するときに安全のことに触れていただいていることを上手に活用していかないと、なかなか難しいなと感じています。

その中で一番は、総合的な学習の時間の年間計画の中に、各学年で安全の時間を設けておりま

す。今回ヒヤリハット登録システムを活用して最終的にピクトグラムを作ったというのは、2年生の総合の時間と各教科のコラボレーションという形の取組です。事前に理科や技術でいろいろ勉強しています。例えば、技術であればタコ足配線がよく危ないかと言われますけれども、その電力量の求め方を学習していたかと思えます。1年生では災害安全に関してやっているのですけれども、これは技術・家庭科の家庭科分野をはじめ3つぐらいの教科のコラボレーションだったと思いますが、最終的には災害時にどういう食事が作れるのかというのを家庭科の時間に調理して、それを英語で説明するポスターを作りました。総合的な学習の時間を絡めてやっている部分と、教科で担える部分を安全計画の中にちりばめてやっております。

○安全に関する資質・能力の評価

田中：安全教育に効果はあるのかということところを一番皆さん思われているのかなと感じています。資質・能力の伸びを測るのは、意識調査みたいなものではもちろん高くは出るのですけれども、それが本当に行動につながっているのかというのはなかなか難しいところかなと思っています。ただ、長年携わっていると、安全教育の成果かなと思われる事象に出会うことはあります。

例えば、2018年に大阪北部地震がありました。本校周辺は震度5強か5弱ぐらいだったのですけれども、都市部での地震ということで、電車がストップしたりいろんなことで話題になりました。そのときに、附属校が同じキャンパスにあるということで、高校生が中心だったのですけれども、駅等で地震を感じた子を引率してくれて、学校までみんなで固まって行こうと声をかけてくれたのが本校の卒業生でした。また、本校は通学範囲が広いのでスマホの所持を認めています。お互いに連絡を取り合って安否確認がすごく早かったです。あのときは朝8時に地震が起きましたので職員もかなり少ない中だったのですけれども、そういうときに生徒たちが運動場にどんどん集まっ

て整列していきました。運動場には教員が1人しかつけなかったのですけれども、大きな指示を出すことなく整列していたということでも安全に対する意識があるのかなと感じています。

発表の中で少しお話しましたが、登下校中に体調の悪い人を見つけたときに介助をするというのも、救命救急講習をかなり頻繁にやっておりますので、そういう効果なのかなと感じております。

○教員に求められる安全に関する資質・能力

庄子：教員に求められる安全に関する資質・能力について田中先生、山根先生にお聞きます。

山根：やはりこれまでも出たように、危険を危険として認識し、そして生徒が自分事として捉えられるように伝える力だと考えます。

田中：それぞれの先生と安全に関する話をすると、かなり高いスキルと意識をお持ちだなと思うのですけれども、教員に今迫っている課題として多忙というのがあります。そこでやはり仕組づくりが大事なのかなと思っています。力のある先生たちに定期的に意識を持ってもらえるような、例えば新聞でも学校での事故や事件が日々たくさん報道されているかと思いますが、そういうのを定期的にみんなで読みながら知る機会があると、多忙の中で忘れ去られがちなものを掘り起こす機会になるのかなと感じています。

○最後に一言

庄子：討議の時間の終わりが来ましたので、お一人ずつから最後に一言いただきたいと思います。

佐合：教職にかかわらずヒヤリハット一般的に言える話として、いわゆる優秀な人ほど危険察知能力が高いということもあると思うので、ぜひ学校現場でも先生方のヒヤリハットというのもぜひいっぱい集めていただいて、よりよい学校現場というのをつくっていただけたらなと個人的には思っています。

もう一点、今日の私の発表では言わなかったのですけれども、工事現場で安全第一と掲げているところ多いと思うのですけれども、安全は第一で

はなくて絶対だと、第二があるわけではないというような意識を持っている企業さんが多いそうですので、そういった意識もぜひ学校現場にも取り入れていただけたらなと思っています。

田中：本校は安全にずっと力を入れて取り組んでいるといっても全然完成形でもありませんし、継続していくことが大事だと常々考えております。そういう意味では、SPSの活動の中でも一番大事なものは最後のシェア、共有かなと思っています。本校は安全に関する取組について視察の受入れもやっていますので、ご興味やご関心あればいつでもご連絡いただけたらと思います。そういう中でいろんな指摘や疑問をいただいて我々の学校安全も形づくっていただけるのかなと思いますので、よろしく願いいたします。

山根：本校でも各教科、道徳、特別活動で安全教育を推進していますけれども、最終的には生徒が自ら気づき、判断し、行動できるというのを狙っています。今回は生徒会活動として、生徒の自主的な活動に移行しながら進めてきました。今後とも様々な方面からの刺激を生徒に与えながら、安全、安心な学校づくりをしていきたいと思っています。

庄子：皆様ありがとうございました。

私の専門が地理学でして、空間を検討するところでは両先生のご発表にありました地図化というのが非常に地理学では使われるところになるわけなのですが、地図は空間を見せる上で非常に説得力のあるツール、見せ方とも言われます。

しかし、同時に見せて終わりになると、その原因まで検討しないというようなところもあると思います。先生方のご発表の中では、決して地図づくりがゴールではないというような言葉もありました。地図をつくって終わりではなくて、きちんとその後の分析というのを、属性の分析であったり、それを地図と結びつけていच्छり、対策として実際にどう動くかということまでデザインされているという点に非常に感銘を受けました。

また、それと同時に、地理の研究者として、特に山根先生のような実践に関しては、異なるレイヤーを、地理の私のような研究者が作るレイヤー

をGoogleに読み込んで重ねていくというのをやっ
ていければ、研究者としてよりダイレクトに教育
現場の中で専門的な部分の情報提供も可能になっ
てくるのとも考えさせられました。

5. 閉会の挨拶

本日は長時間にわたりまして、大変高い知見と
有意義なご発言をいただきありがとうございました。
お三人の講師の先生方には、大変心に残るメッ
セージを頂戴したというふうに考えております。

お一人目の佐合さんですけれども、知っている
はずなのに、それが例えば焦りに起因してしまう
ヒューマンエラーにつながるとか、ポイントは未
知ではなくて、既知の部分、ただその共有が不十
分だったというところから説き起こされて意識変
革に向かう、そういうことの重要性の指摘だった
と思います。私なりに聞いたところでは、形骸化
してしまうことによるある種のすっぽ抜けみたい
なこと、それについて不断の再認識を説き起こし
ていかなくはいけないものとして承りました。

田中先生のお話も大変勉強になりました。SPS
の先駆的な実践例ということで非常に高い意識の
校風を持たれていて、それが感性の教育というこ
ろまで昇華されている。そこにまずもって感銘
を受けたのですが、併せて合教科的と申しますか
教科横断的なメソドロジーですね。それを通じて
生徒さんたちの自主的な参加意識に説き起こし
ていく。そういう部分で、学習者の主体性という
ところに確かに教室内の学びが手渡されていくと
いう実感を強くいたしました。

山根先生におかれましては、岩手でもとりわけ
コミュニティ・スクールの意識の高い地域、そし
て喫緊の課題のところでもご指摘いただいたよう
に、地域社会の大きな変貌に対して学校現場のほ
うから起こしていく。コミュニティ・スクールと
いうことで言えば、PTAの、あるいは保護者の意
識の高さということについて、地域社会がここま
でできるのだというところを見せていただき、こ
れも大変感銘を受けました。あわせて、ネット依
存に関してのスクリーニングテスト、気づきを促

す方法論というところで、最初の佐合さんの既知
と未知の切り分けのところにまた戻っていくとい
う、そういう意味で三人の先生方のご発表が私
の中でリンクしてきたという実感を持っています。

フロアの方からの質問の中に1つ重要なキー
ワードがあったかと思います。それは、安全への
感性という言葉だったかというふうに感じており
ます。安全への感性ということ言えば、1つの
キーワードはすっぽ抜けで、それからもう一つは
自主的に参加することによってそれを自分のもの
にできているかということ、そしてもう一つは気
づきについての方法論というようところでキー
ワードを頂戴したという感じを持っています。

くしくも岩手、盛岡市内、午前中は穏やかな天
気でしたけれども、今雨が降ってきて強い風が吹
いていたりします。空は真っ暗になりました。天
気予報を見ていると、来週は真冬並みの寒波が
来るということで、暖かかった11月も終わって、
一気に冬が来るようでございます。毎年この時期
に必ず暖かくしてお出かけくださいであるとか、
冬タイヤへの換装はもう済みましたかとかとい
うようなことが毎年必ず言われます。それにもか
かわらず、毎年必ず同じような事故が起きます。

学校安全学は、確かに学校の中で児童生徒を守
ると同時に、どうやって自分たちを守っていく
かということについて開かれていく学びである
というふうに思いますけれども、学校安全学とい
う学びの形が広く社会生活全般に対して一つのモ
デル、あるいはもっと言えば一つのメタファーに
なるということが実は強く求められているのでは
ないかと。先生方のお話を聞いてその思いを非常
に強くいたしました。大変勉強になりました。どう
もありがとうございました。

(境野 直樹)